

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520555

研究課題名(和文)「節」の構造に関する歴史的研究

研究課題名(英文) A study on history and structure of "clause"

研究代表者

青木 博史(AOKI, Hirofumi)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90315929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：「節」の構造と歴史的变化について、連体形および連用形によって構成される節について記述した。従来断片的に言及されてきた諸現象を、統一的に把握し説明した。記述にあたっては、古典語における単なる共時的な分析にとどまることなく、歴史的变化をダイナミックに描いた。さらに、望ましい日本語文法史の説明、叙述のあり方として、位相論や文体論、方言研究とも連携しながら、複線的・重層的なストーリーを描くことの必要性を述べた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to investigate the historical change and the structure of "clause". I explained that a dynamic picture will emerge regarding the evolution of Japanese grammar which will reveal the roots of contemporary varieties of Japanese. Historical research must also continue to develop in conjunction with the study of styles, social classes and dialects, so that it can describe the entire "story" of the the Japanese language, tracing every tributary stream.

研究分野：日本語史

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：歴史的变化 日本語文法 節 準体 複合動詞

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「連体節」「名詞節」といったカテゴリーに基づいて、文の構造とその歴史的变化を捉えることを目的としている。たとえば「名詞節」は、述語で形成される節そのものが名詞相当になるものであるから、伝統的な国語学の分野で「準体句」と呼ばれてきたものにほぼ相当する。そのような伝統的な用語を捨て、ここで「名詞節」という用語をわざわざ使うのは、述語が形成する「節」のひとつとして捉え直すためである。古典語における主節の述語は、係り結び文を除いて終止形述語によって構成されるため、連体形述語によって構成される名詞節あるいは連体節と区別される。ところが、中世頃から連体形が主節の述語となるようになり、ここにおいて述部における連体節あるいは名詞節は、形のうえで主節述語と見分けがつかなくなる。このような形態統語論的観点に基づくとき、「名詞節」といったとらえ方は有効にはたらくものと考えられる。つまり、これまで「連体形終止の一般化」と呼ばれてきた現象は、述語として用いられた「名詞節」の構造が変化し、主節となったものと捉え直されることになるのである。

さらに、この連体形終止の一般化がもたらした述部における歴史変化には多くの事象が挙げられるが、「ヨウダ」「ソウダ」「ダロウ」「ラシイ」などの現代語における重要なモダリティ形式は、直接的に関係している。たとえば、「ヨウダ」は「述語連体形+ヤウ(様)」にコンピュータがついたもの、つまり「様子」を表す形式名詞「ヤウ」を主名詞とする名詞述語文であった。これが次第に、「様子だ」という判断が「ヨウダ」という形式に焼き付けられ、助動詞として切り離されることになる。助動詞の側から見ればこのように記述されるが、節述語の側から見れば、形式名詞を修飾する連体節であったものが主節述語へと変化しているわけである。このような「節」の構造変化に注目して記述することで、新たな研究の可能性が広がることとなる。

これまでの日本語文法史研究においては、このような統語論的観点からの研究は、ほとんど行われなかった。まとまった研究としては、準体句とそれに関連した助詞を記述した石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』、これを承けた近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』、助動詞の相互承接に注目した北原保雄(1980)『日本語助動詞の研究』があるくらいである。また、準体句に関する研究、接続節に関する研究などは個別に存在するが、これらを広く視座に収め、日本語文法史全体に位置付ける試みは行われていない。

2. 研究の目的

本研究は、上で述べたような背景をふまえ、先学の研究成果を発展的に継承し、日本語学にとどまらず、世界の言語学へ貢献しようとするような記述・説明を目指していく。すなわち、

古典語における「節 (clause)」の構造と歴史的变化について、統語論的観点から説明することを目的とする。これまでの古典解釈を中心とした日本語文法史研究では、「節」という概念はさほど重要なものではなく、また統語論的観点からの研究もほとんど行われてこなかった。本研究は、そうした視点からの研究が現代日本語研究、さらには世界の言語研究に対して理論的に貢献しうるものとなることを示す。古典語における単なる観察・記述にとどまらず、現代語(方言も含む)までを視座に収め、歴史的变化をダイナミックに描くものとする。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するにあたっては、まずは中古・中世から近世・近代にわたる文献資料の精査を行い、実態を観察することから始める。次に、当該の文法形式の構造および歴史的变化について記述を行う。特に、中世後期から近世後期にかけての記述が重要であり、これまでの文献学的・国語学的成果に基づきながら解釈を行う。これには現在方言を参照しつつ、当時の言語的位相も視野に入れながら分析する必要がある。そして、現代語の理論的枠組みを参照しながら、必要十分な説明を与えていく。

これまでの研究において、古典語の構造を捉えようとしたものの多くは共時的な研究にとどまっている。現代語との対照研究のような形であるが、本研究ではさらに、現代語まで視座に収めた歴史的变化をダイナミックに描くことを目指している。これによって、歴史統語論という日本語文法史研究の新たな分野を開拓することになると予想される。

また、言語史を研究する立場において、文献資料が必要であることはいままでもないが、まずは資料の正確な理解が必要である。理論的な研究を進める際におろそかになりがちな、用例データに基づいた実証的な研究、さらには言語事象がその資料の性格とどのように関係しているのか考慮した、言語研究と一体となった文献学的研究を同時に行っていく。このようなスタンスをとることによって、理論と実証のバランスのとれた研究として意義深いものとなると考えられる。

そして、最後に、方言事象を視野に収めながら歴的研究を進めていくことを付言しておく。文献資料によって仮設された歴史を、方言との対照によって相対化するという視点は極めて重要である。方言への展開も含めた歴史的变化、あるいは方言データから推測される歴史と文献に基づいた歴史との対照など、方言と文献の両面を視野に収めた幅広い視点から研究を進めていくものとする。

4. 研究成果

(1) 連体形によって構成される従属節は連体節と名詞節に分けられるが、このうち名詞節の構造と歴史的变化について、統語論的観点

から説明を加えた。文中で格成分としてはたらく場合、文中で接続成分としてはたらく場合、文末で繫辞に続く場合、文末で単独で用いられる場合といったように、統語的環境の相違に注目しながら記述した。

格成分、あるいは繫辞の前に用いられた名詞節は、名詞句としての名詞性を保証するために、近世初期頃から節末に「の」を表示した形が用いられるようになった。興味深いのは、名詞節は、ここから主節や接続節として脱範疇化を起し、述語性を発揮するという点である。格成分から接続成分へと構造が変化することは、古典語準体句でも起こったが、同じように「のに」「ので」「のなら」などの形が、近世期を通じて接続助詞として確立していった。また、文末では、「のだ」「のだろう」といった形式が、やはり助動詞として確立していった。

準体助詞「の」の歴史から見てとれる重要な点は、文法変化は、発生、発達、定着といった、いくつかの段階に分けて捉える必要があるという点である。いずれの統語的環境においても、近世初期に成立した「の」であったが、近世期を通じて完全に定着するには至らなかった。新しい「文法」への認識は、徐々に進んでいくことが示されたことになる。

以上のように、準体句の歴史をめぐって、従来断片的に言及されてきた諸現象を、統一的に把握し説明することに成功した。

(2)連用形によって構成される従属節について、いわゆる複合動詞に注目してその統語的性格と歴史変化について記述した。

古代語は「複合動詞化」の萌芽期であり、基本的には[[項+V1][V2]]のように、V1を主要部とする動詞句にV2が連続する構造である。そこからV1とV2が「語」としての結びつきを強めていくが、こうした近現代語的な複合動詞への転換期は、中世室町期頃と見ることができる。

「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」は、重要な概念であるが、現代語そのままの定義では古代語を分析できない。古代語の「動詞連用形+動詞」は基本的に「動詞句+動詞」という構造であり、その意味において、古代語の複合動詞はすべて「統語的」であるからである。しかしながら、「統語的」を「文法的」と置き換え、生産性の違いと見ることによって両者を連続的に位置付けることが可能となる。すなわち、V1とV2が複合語として結びついた(語彙化した)後、後項V2が文法的要素として発達するという、文法化の現象としてこれを捉えることができる。

従来、古代語には複合動詞は存在しなかったとする見方が一般的となっており、歴史的観点からの複合動詞研究は活発に進められてこなかった。しかしながら、以上のように、現代語の理論的枠組みを活かしつつ、現代語の複合動詞はどのような歴史的所産の上に成り立っているのか、そして、古代語から現

代語へと至るにしたがってどのような変化があったのか(あるいはなかったのか)について、新しい説明を与えることに成功した。

(3)「節」の構造の歴史的变化の記述を通して、望ましい日本語史の説明、叙述のあり方についても考えるところとなった。それはすなわち、単なる事実の羅列でない、研究者の解釈によって描かれる「ストーリー」であるべき、という考え方である。ただ、何ををもってストーリーといえるのか、日本語の歴史を必要十分な形で説明しうるのか、そのあるべき姿というのは共通理解が得られているとは言いがたく、具体例を通じて説明を積み重ねていくことが重要である。

これまでも文法史研究は、体系(文法)と部分(語彙)、歴史的变化と通時的変遷など、その概念と用語にも注意を払いながら進められてきた。そして、「係結的断続関係」から「論理的格関係」へ、「開いた表現」から「閉じた表現」へ、あるいは「総合的」から「分析的」へ、といった優れた捉え方が示されてきた。またその一方で、近年、一般言語学的観点から、特に機能語化に注目した「文法化」という見方も提唱されている。こうした様々な提案を、我々は発展的に継承していく必要がある。

また、従来、「文体」という用語で括られてきた事象を、「文法」の範囲に収めて考えることで、「文法史」の記述はさらなる拡がりをもつ可能性がある。近代における異言語接触によって発達した、八構文、原因主語他動文、ニヨッテ受身文などである。さらに、方言研究との連携も重要である。単純な意味での「日本語史=中央語史」ではなく、言語の階層性・重層性に気付かされるからである。

以上のように、位相論や文体論、方言研究とも連携しながら、複線的・重層的なストーリーとしての文法史を描くことの必要性を述べた。

(4)本科研の中心テーマである文法論と直接的に結びつくものではないが、対人配慮という「機能」からアプローチする方法論が、歴史的研究においてどれだけ有効にはたらくかを検証する試みを行った。日本語史を考えるうえにおいて、重要な方法論である。

古典語を対象とする場合、残された文献資料に依存せざるをえないため、表現体系の記述にはなかなか至ることができない。テキストという閉じられた世界であるがゆえに、その作品に現れない形式が、当時本当に存在しなかったのか、それとも存在はしたが作品中に現れないだけなのか検証できないからである。しかし、ここではこうした懸案をいわば括弧に括り、時代を代表する文献資料の様相に基づく観察を時代の様相として提示し、時代ごとの様相の相違を「変化」とみなして仮説を立て、積み重ねた仮説を検証するという方法論を用いた。

具体的には、行為要求を行う「命令・依頼」と、要求を拒否する「断り」という場面にスポットを当てて考察した。このとき、注目されるのが、「詫び」表現（「すみませんが」「申し訳ありませんが」など）である。中世末までの資料においてはこのような形式を「前置き表現」として用いることはなく、これが近代語において発達した形式であることが明らかとなった。こうした形式の変化を反映する、対人配慮の「機能」の変化がここにあったものと考えられる。

「配慮」をキーワードに据えた研究は、現代語を対象として近年非常に盛んになってきており、こうした研究に対して、歴史的観点からの記述は重要である。方言や他言語との対照研究の成果報告もあり、これに歴史的観点からの研究を加えることで、さらなる発展が見込まれる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計8件)

青木博史，複合動詞の歴史的变化，『複合動詞研究の最先端』，影山太郎編，ひつじ書房，査読無，pp.215-241，2013年。

青木博史，文法史研究の方法，特集：これからの古典語文法研究，『日本語学』32巻12号，明治書院，査読無，pp.56-68，2013年。

青木博史，日本語文法史研究の射程，『国語研プロジェクトレビュー』4巻2号，国立国語研究所，査読無，pp.82-88，2013年。

青木博史，クル型複合動詞の史的展開 歴史的観点から見た統語的複合動詞，『日本語文法史研究1』，高山善行他編，ひつじ書房，査読無，pp.189-210，2012年。

青木博史，異言語接触と日本語文法史，『文献探究』50号，文献探究の会，査読無，pp.72-86，2012年。

青木博史，コミュニケーションと配慮表現 日本語史の観点から，コミュニケーションと共同体，光藤宏行編，九州大学出版会，査読無，pp.45-59，2012年。

青木博史，書評：山田昌裕著『格助詞「ガ」の通時的研究』，日本語の研究』8巻1号<通巻248号>，日本語学会，査読無，pp.110-115，2012年。

青木博史，述部における名詞節の構造と変化，日本語文法の歴史と変化，青木博史編，くろしお出版，査読無，pp.175-194，2011年。

〔学会発表〕(計6件)

青木博史，古代語における「複合動詞」，ワークショップ：「語」と「句」の間，麗澤大学言語研究センターシンポジウム「名詞的表現の機能に関する対照言語学的研究」，麗澤大学，千葉，2014年1月11日。

青木博史，日本語における複合動詞の構造と歴史，2013年度臺灣大學文學院「跨國界的文化傳釋」演講，台湾大学，台湾，2013年11月19日・20日。

青木博史，“ストーリー”としての日本語文法史，シンポジウム：日本語史はいかに叙述されるべきか，日本語学会2013年度秋季大会，静岡大学，静岡，2013年10月26日。

青木博史，言語変化と文法史研究，JLVC2013（国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会），国立国語研究所，東京，2013年3月21日。

青木博史，接続部における名詞節の脱範疇化について，NINJAL 共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」シンポジウム，国立国語研究所，東京，2012年12月15日。

青木博史，レキシコンと言語変化：歴史的観点から見た複合動詞，シンポジウム：日本語レキシコン研究の最前線，関西言語学会第37回大会，甲南女子大学，神戸，2012年6月2日。

〔図書〕(計3件)

青木博史・他，木田章義編，国語史を学ぶ人のために，世界思想社，第5章 文法史，pp.141-183，全340ページ，2013年。

青木博史・他，高山善行・青木博史・福田嘉一郎編，日本語文法史研究1，ひつじ書房，全276ページ，2012年。

青木博史編，日本語文法の歴史と変化，くろしお出版，全264ページ，2011年。

6. 研究組織

(1)研究代表者

青木 博史 (AOKI Hirofumi)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：90315929